信じる心

新年を寿ぐ

新年おめでとうございます。皆様には恙無く新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。また喪中の皆様にはお見舞い申し上げます。

今年は、辰年であります。十二支の中でも辰のみは、実在する動物ではありません。しかしながら、仏教に深い縁があります。

そもそも「辰」とは何であるか。『広辞苑』では「十二支の第五。動物では竜に当てる」と解説されています。

岩波書店の『仏教辞典』には、梵語の「ナーガ」であり、「蛇に似た形の一種の鬼神。天竜八部衆の一つ。インド神話におけるナーガは、蛇(特にコブラ)を神格化したもので、大海あるいは地底の世界に住むとされる人面蛇身の半神。彼等の長である〈竜王〉は巨大で猛毒をもつものとして恐れられた半面、降雨を招き大地に豊穣をもたらす恩恵の授与者として信仰を集めた」と書かれています。

さらに「ナーガは仏教でも初期聖典以来知られ、特に仏伝文学には仏陀を豪雨より護った竜王の話などが見られて、早くから仏教彫刻などの題材ともされた」と書かれているように仏教の守護神として大切にされています。

「降雨を招き大地に豊穣をもたらす恩恵の授与者として信仰を集めた」という事例として、円覚寺にも龍にまつわる話が伝わっています。

『佛光國師語録』にある話です。弘安八年六月二十四日、長らく日照りが続いて雨が降らないので、当時の執権北条貞時公が、仏光国師に水墨の龍を持参してそれに讃をしてもらい雨が降るように祈りました。仏光国師が讃を書くと、たちまち雷が鳴って、そのあと三日間雨が降り続けたというのであります。

雨が降らないということは、農作物ができませんのでたいへんなことになります。昔から禅僧はあまり祈祷をしたりはしないのですが、雨乞いの祈祷をしていることがよくあります。ただ坐禅だけして超然と暮らしていたのではなく、多くの人たちと苦しみを分かち合って暮らしていたのだと察します。

信じる心

雨乞いの名人の話を聞いたことがあります。名人の秘訣はただ一つ、雨が降るまで祈るというのです。簡単なことのようですが、深い話でもあります。

必ず降ると信じてあきらめないということなのです。これはいろんなことにも通じます。今からもう四年前となりますが、新型コロナウイルス感染症が蔓延して、緊急事

態宣言が出たりして、世の中がいっぺんに変わってしまいました。その頃、色紙に、

嵐はかならず
去る
火はかならず
消える
夜はかならず
明ける
このことがわかれば
大抵のことは解決する

という坂村真民先生の「広いお胸」という詩の一節をよく色紙に揮毫していました。どんな苦しい状況でも必ず変化してゆきます。いつか必ず日は射してくると信じて待つことが大事なのだと改めて学びました。明けない夜はないという通りに、三年ほどで感染症もおさまってきて、だんだんと元の暮らしに戻ってきたのでした。

昨年は、WBC日本代表監督を勤めた栗山英樹さんと対談する機会に恵まれました。栗山監督と対談した記事には、「信じる」という言葉がたくさん使われていたのが印象に残っています。選手のことを信じる、信じて待つのだという監督の思いが忘れられません。

私たちの禅の修行においても信じることは大切であります。信じることが大きな力になるものです。

朝比奈宗源老師は、「人間は誰でも仏と変わらぬ仏心を備えているのだ。これをはっきりと信じ、言わばここに井戸を掘れば必ず井戸ができ、水が出るという風に、信じ切らねば井戸は掘れぬ。掘れば出ると思うから骨も折れる。だから我々の修行もそれと同じだ。仏心があるとは有り難いことだと、こう思わねばだめだ」と仰せになっています。

なにを信じるのかというと、私たちも仏様と同じ心をもって生まれているのだと信じることなのです。皆仏心をもって生まれているのです。

そこで臨済禅師は「このごろの修行者たちが駄目なのは、どこにその病因があるのか。病因は自らを信じきれぬ点にあるのだ」と端的に述べられています。臨済禅師の言葉を集めた『臨済録』にも「信」という言葉がたくさん出てきています。自らを信ぜよ、外に向かって求めてはならないと繰り返し説かれています。

信じてくれている

『法華経』に長者窮児の喩えがあります。長者の子供が、幼い頃から家を出て、流浪の暮

らしを送っていて、長じてのち、たまさか父である長者の家の前を通ります。長者はわが子を忘れるわけはなく、すぐにわが子だと気がつきます。

ところが、子供は父であることに気がつきません。長者はなんとか気づかせようとして、まずお手洗いの掃除をするようにして雇います。それからさらに室内の掃除をさせ、だんだんと慣れさせていって、自分の身の回りの世話をさせます。やがては、自分の財産の管理などもすべてまかせてしまいます。しかし、子供は、これらの財産は皆長者のもので、自分とは関わりのないものだと思っています。

そうして、ある日、村の名士たちを集めて、その前で、この青年はわが子であり、わが財産はすべてこの者の所有であると宣言

したという喩え話です。

長者は仏であり、その子というのは我々迷える衆生を指しています。

この喩え話は、長者の子が、自ら長者の子であることに気づかず迷い続けていて、少しずつ気がついてゆくという過程を表しています。お互いが仏の子であり、素晴らしい仏の心を授かっていながら、そのことに気がつかずにさまよっていたのです。

最近になって気がついたのは、長者の気持ちです。長者はずっと、わが子がきっと気がついてくれると信じて待っていてくれたのです。きっと分かってくれるはずだ、気がついてくれるはずだと、信じて待っていたのです。

このことに気がついたのは、先代の管長足立大進老師を見送ってからでした。二十六の歳で鎌倉に来て、老師のもとで三十年近く修行させてもらいました。ずっと自分が修行してきたとばかり思っていたのですが、師匠の棺を覆って初めて、師匠が自分のことを信じて見守ってくださっていたのだと気がつきました。なかなかご生前には気がつかないものでした。

師匠が信じてくれていた、その「信」の中で修行させてもらってきたのです。信じてくれている人がいると思うと、それは大きな力になります。誰か一人でもそんな人がいてくれたなら、どんな苦しみにも耐えられるものです。もしそういった方がお近くにいなければ、亡くなった親や祖父母でもいいでしょう。きっと信じてくれていると思うと、大きな力になります。

お仏壇に手を合わせ、お墓にお参りした時に、自分のことを信じて見守ってくれているのだと思ってみると、大きな力が湧いてきます。自らを信じることも力になりますし、信じてくれていると思うことも大きな力になるものです。

今年もよい年であることを信じています。